会　報　69　　白鷹町史談会

史　　談

2023（R５）８．25

■令和５年度史談会総会の報告

猛暑の夏が続いております。会員の皆さんには御健勝でお過ごしのことと存じます。

さて、本年度の総会及び懇親会を下記のように開催いたしました。概要を報告いたします。

記

1　期日　令和５年６月25日（日）

2　場所　十王地区コミュニティセンター

3　時間　午後１時から総会、講演会

4　総会内容

⑴ 令和４年度事業報告、決算報告

⑵ 役員改選

⑶ 令和５年度事業計画、予算案審議

⑷ その他

以上の議案について原案のとおり承認

なお、役員については全員留任

5　講演会　午後２時15分から

⑴ 講師　加藤和徳氏（県文化財保護協会理事）

⑵ 演題　羽前の庚申塔

–庚申縁起・三尸～最新の研究まで–

講師の加藤さんは上山市にお住まいで、石造文化財の研究家として、山形県随一の方です。

本会事務局長守谷は置賜民俗学会、『長井市史』の執筆者、山形県文化財保護協会などで、しばしば加藤さんの学識に触れる機会が多い方でもあります。

当日のお話で私が印象深かったことは、加藤さんが民俗学に興味を持った初めは民間信仰であったこと、そして若いときに柳田國男と直接あったことがあることなどでした。

本題の庚申塔については、庚申信仰のそもそもから白鷹町の庚申塔までわかりやすくお話いただきました。大変ありがたいことでした。

さらに御自身が作られた『蓬莱波形山叢書』を何周かお持ちいただき、第８集「山形県長井市・西置賜郡の板碑」他を数冊本会に寄贈くださいました。「あゆみしる」で販売していますので、御利用ください。

6　懇親会　午後４時30分から

４年ぶりに懇親会を開催しました。講演会講師の加藤さんにも御参加いただき、少人数ながらも様々な話を咲かせました。こういうことができたことを本当にうれしく思っています。

■本年度史談会研修旅行を開催します

今年度は史談会研修旅行を久しぶりに開催します。御家族の方も含め、ふるって御参加ください。また行程の確定が遅くなりまして、町報での広報ができませんでした。お知り合いの方もどうぞお誘いください。

日程　令和５年９月21日(木)

行程

7：15　荒砥地区コミュニティセンター集合

7：30　出発

9：50　多賀城跡あやめ園着

多賀城跡（外郭築地塀跡・多賀城碑など見学

史跡巡りＡコース　１時間10分　徒歩

11：00　出発

11：10　東北歴史博物館

常設展示　460 円（20 人以上は 360 円）
12：00〜13：00　昼食
東北歴史博物館内のレストラン
ランチセット 2000 円
古代米おにぎりとサラダなど。
14：00　野草園
園長早坂さんのガイド。野草園の歴史と植生。
15：00　帰路
17：00　荒砥コミセン到着、解散
参加料
会員外　3,000 円、会員　2,000 円

■企画展「湯殿山行者　明寿海上人①」を開催します

町歴史民俗資料館あゆみしるでは、9 月 1 日から企画展を開催します。塩田行屋を開いた湯殿山の一世行人 明寿海上人について、南陽市小滝の生家に保管された遺品から紹介します。

明寿海上人は天保元年（1830）に生まれ、大日坊に入門後、湯殿山で修行、穀物を断つ木食行を修めました。明治 8 年（1875）に十王村に移住し、2 年後に塩田行屋を建立します。南陽、白鷹からの信仰だけではなく新潟県長岡市方面を霞場として、明治 42 年に 80 歳で逝去するまで、湯殿山行者として活躍します。

今回、明寿海上人の生家から遺品をお借りできたのは、中川栄子図書館長のおかげでした。中川館長が小滝小学校の教頭をしていらっしゃた時、保護者から「先祖に塩田行屋を開いた上人がいる」という話を聞いたと教えてくれ、松田家へお伺いする時も同行くださいました。こうした地域の歴史を教えていただけると、子どもだけではなく大人にも学ぶ機会ができるのだと感じます。本当にありがたいことです。

このご縁を大切に、まずは明寿海上人について町内外の方に知ってもらい、次の企画展示では弟子や白鷹に出入りした湯殿山行者について広くお知らせできるよう準備を進めていきます。

明寿海上人の遺品は初公開となります。ぜひご覧ください。

会　期：令和 5 年 9 月 1 日〜10 月 1 日
うち金・土・日曜日開館
時　間：9 時〜17 時
観覧料：一般 200 円（常設展含む）、中学生以下無料、団体 100 円（10 人以上）
＊水・木曜日の観覧は事前にご連絡ください。
電　話：88-7160（開館時）または教委 85-6146
（石井）

■あとがき　奥村先生の著書

昨年から奥村幸雄先生の著書および『雪国の春』をあゆみしるで販売しておりますが、その人気の高さに驚かされます。小国から注文の電話が入り、山形大学の先生がまとめ買いをしていき、さらには東京で箕の研究をしている方から問い合わせがあるなど、先生の調査がいかに綿密で役立つものかが分かります。明寿海上人についても、松田家へ調査に行って『雪国の春』10号に執筆しています。このような文章は書けませんが、何かしら後に残せるような記事を書きたいものです。本年は『史談』の発行年、皆さんの原稿をお待ちしております。（石井）